

ホトトギス

昭和二十四年三月二十八日運輸省特設郵便承認証第六十七号
明治三十一年十月十日第三種郵便物認可(毎月一回一日発行)
平成十六年三月一日発行(第百七巻第三号)

ホトトギス

三月号



平成十五年三月一日 芦屋ホトギス会

梅が香に 偲ぶ心を 繻きぬ
春雷の通り過ぎ 雨上り来し
中辺路の春 椎茸の 樽とこそ
面影のふと 失せしとき 鳥曇

三月二日 関西野分会

苗札を汚してよべの雨上る
春雷の去りて大地の動き初む
喪心といふ春眠に似たるもの
松風を先立てて来し春の雷
苗札の字の消えかけてをりしこと

三月三日 下萌句会

たゞ 仰ぐばかり 大空 鳥曇
あたたかや昨日の雨を忘れつつ
淋しさは口には出さず 鳥曇
よべ雨のありしを告げて春の川
三月三日 ロイヤル俳壇

蛇穴を出て 雨一日 風一日

春めくや仕事崩して ゆく机辺
波置いて行きし若布の光りけり
又雨の一日となりぬ 春めきて

三月八日 関東ホトギス俳句大会前日句会

岩に裂けたる 春潮の 沖平ら
春日焼まぬがれ 難く海を見る
三月九日 関東ホトギス俳句大会

朝寝組 朝市組と会ふ 朝餉

分宿の人を見送る 春の宵

三月十一日 大阪倶楽部

諸子釣る日溜りいつも 五六人
その後のことに集ひぬ 春の雪

訪へば声しさうな部屋よ暖かし
春の雪降らす雲又通りけり
もの芽のまだ踏みさうに踏みさうに
句ふものより春の卓活けらるる
三月十一日 綿業倶楽部

日々採れる 春椎茸の 樽二本
春子楯前からそこにあるやうに

三月十三日 清交社

ぬきん出しより水騒ぐ 蘆の角
間消して燃え盛りたるお松明
移りゆく季節のはさま春の雨
謂れ聞きたるより親しお松明
春雨に訣るる宵となりにけり

風渡る水面きらめく 蘆の角
まだ花の予測立たねど案内状
遺されし我等に春の雨上る

三月十四日 工業倶楽部

改修の成りたる沼や水草生ふ
山の音ここに集めて水草生ふ
竣工の近し春めく日々となる
花便そろく 聞くこえ来しことも
三月十八日 祝 田鶴四百号

田鶴つばさ広げ 遙かを目ざしけり
新しき 芽の力を

三月十八日 有恒倶楽部

みよしのへ 旅路ありけり 西行忌
暖かく見えてみし庭出てみたる
雲雀野に踏み込んでみし旅心
足許を立ちて雲雀の空となる
結局は菜飯に誘ふこととなる

西行の花の心を問ふ 旅路

暖かと思ひ直して出掛け来し

三月十八日 無名会

そののちの口々に追はれて春めきぬ

尊生ふ 三瓶の 沼の 消息も
春めくや水辺に人の気配置く
逢へさうに思ふ 春めく上京は
春めいてをりしことさへ 気づかず
やうやくに 目途つく 仕事 春めきて
三月十九日 夏潮句会

本復の 喜び 分か つ 桜餅

雛の客あり 雛をさめ 又先に
初花といへど 視線のつながらず
初花となる きっかけの口なるか
まなざしは 初花の一点にあり
たちまちに ミモザの空となりにけり

三月二十二日 句会と講演の会

炬塞は 心の 折目とて 家居
若き死を惜みつゝ 炬を塞ぎけり
目刺焼くときの 煙の行方かな
三月二十二日 悼 米谷孝様

三月二十九日 野分会

俳諧に 尽くされし 日々 惜む 春
苗札の 隠れし 位置を 確かめぬ
苗札に 期待の 土の まだ 平ら
三月二十日 時雨会

会へば 又用の 増えぬし 腫かな

七七忌 近き 腫の 夜の 電話

花嫁の 父とし 迎へ 春めきぬ

本復の 喜び 分か つ 春の 宵

腫夜を 抜けて 一人の 昇降機

三月二十九日 ホトギス社吟行会

花冷の 少しあり つつ 雨上る
文豪の 通ひしなら ふ花の 坂
快晴や 花の 遅速は 問ふまじく
これよりは 花に 浮かる 日々ならむ
三月三十日 祝 川口明子様御結婚
初蝶の 連れ 飛ぶ空の 明るさよ

夜 空

稲畑 汀子

朝日カルチャーの授業を終えてロビーに出ると、もう同乗する千原叡子さんが待っていた。

「お待ちませ。皆に西播磨天文台のことを話したので、早々と出てくるのが出来たのよ。後はひろさん達が句稿をまとめてわが家に届けて下さることになってるの」

「先生、お早いでしたね」

驚いている叡子さんを促してエレベーターへ向った。

「さあ、行きましょう」

駐車場を出て右に曲がると阪神高速の入口はすぐである。そこから空港線を通りそのまま池田へ出ると中国自動車道へ乗り継げる。高速道路は空いていた。

「案外早く着くかも知れないわ」

「皆さんがびつくりなさるでしょうね」

六万年ぶりに火星が地球に接近すると知ってから夜な夜な空を仰ぐようになった。我々の生活の中で夜空に星を見ることが出来なくなつて久しい。南東に赤く燃えている火星を見つけては嬉しくなつていた。旅先でも火星はすぐに見つけることが出来た。

中秋の名月には火星が月の下をペンダントのように見えるといふことが報じられ、大勢の人達の興味を誘つた。

「私たちが計画したのですが、岡山県に近い兵庫県の佐用にある天文台で星を見て句会をするというのは如何でしょう。一泊になりますが……、有恒倶楽部のメンバーに声を掛けて人数が足りない時は他の方にも参加して頂くということにしたいのですが」

「素晴らしいですねえ。その日は朝日カルチャーですが、三時に終わるのでそれからお伺いすることになりますが、いいでしょうか」

「それは嬉しいです。先生が来て下さると、皆、張り切るでしょう」

星と聞いたら何が何でも参加したい気持ちになつてしまふ自分を抑えても、今年は火星が特別に近く見えるのだから、と言う大義名分がある。月末の仕事の追い込みを何とか早め早めに済ませれば何とかなると自分に言い聞かせた。

車を走らせながら今夜の天気も気になつた。雲があると夜空は仰げない。

中国自動車道はよく空いていた。所々厚い雲があつてもすぐに青空が戻ってくるのだがそれでもだんだん心配になつてきた。

「叡子さん、雲が少し気になるわねえ」

「大丈夫ですよ。汀子先生は晴れ女ですもの」

「そう願いたいわねえ、でも雲には勝てないわ」

「本当ですよ」

台風十六号が関東の父島を通過しているので、風が強い日にな

っていた。案外、雲が動いているのでいいかも知れなかった。佐用インターチェンジを抜けて、後はナビゲーターが頼りである。山道にさしかかると星空への期待が急に現実になって行くようでハンドルに力が入った。

「早いお着きですね。スピードを出されたのでしょうか」

「いいえ。そんなことはありませんよ」

叡子さんが答えてくれる。

総勢三十名が割り当てられた各自ロッジの部屋に納まり、私の部屋はあやさん、桂子さん、智津子さん、叡子さんと私である。飛入りの弘子さんは志鳥夫人の由紀子さんと同室である。

幹事の西村やすしさんによるスケジュールは実にきめ細かな配慮がされていた。広い緑の芝に覆われた小高い丘のてっぺんに天文台がある。そこで天体望遠鏡で火星を見て句会をする。夕食の時間まで自由である。

辺りが暮れ始めると一段と火星が輝いて来た。と同時に雲の動きも活発となり、不安定な空模様となつて行く。

「あ！落ちてきましたね」

「本当、秋時雨ですね」

傘を広げて夜空を仰ぐと時雨を霽した雲はもう遠くに去つていた。いつの間にか見事な星空になっている。天文台へ登る足許はすっかり暮れていた。

「今日は風が強いので火星が揺れているでしょう」

天文台の係の人が親切に説明してくれる。

「あ！ほんとうだわ」

「じつとして見える時は火星の南極の白い部分が見えるのですが今日は残念です。さあ、次々見て下さい」

「目が回りそう」

「次はベガをお見せしましょう。七夕の織姫です」

足許が覚束なくて、下の句会場へ先に行くことにした。五、六人が既に降りていた。

ロッジは五人一部屋と言うものの、寝室二部屋、リビング兼ダイニングにキッチンが揃つていて快適で広々している。テーブルを挟んで座ると話が弾んだ。

「さあ、明日があるわ、もう寝なければ」

「でもこのまま寝るのは勿体ないわよ。私はもう一度、空を眺めてから寝ることにするわ」

階段を降りて靴を履いて外に出た。真つ暗な闇の中に立つて振り仰ぐと一面の星月夜である。地球にこんな夜空があつたなんてすっかり忘れていた。

「あ！流れ星」

「天の川も見えますねえ」

火星はどの星よりも輝いている。この夜空を胸にしつかり畳み込んだ。

ホールの一つのドアから賑やかな声が聞こえて来る。

「今晚は」

そつと半開きのドアを押して覗いて見た。

「先生、どうぞどうぞ」

一瞬戸惑ったが、

「皆さん、外は素晴らしい星月夜ですよ。外に出て夜空を仰いで
下さる」

「そうだ、そうだ、行きましょう」

せっかく杯を上げて楽しんでた仲間になんと申し訳ない気がしたが、強引に外へ誘い出した。

「先生、素晴らしい星月夜でした」

寝るのが勿体ない一夜が過ぎて行った。

廣太郎句帳

廣太郎

三月八、九日 関東ホトトギス大会

人生に大試験とは終りなし

強東風に触れて黒潮立ち上り 春の雪昭和十一年の事

春の海やはり地球は丸かつた 大試験どころではなきニュースかな

喪心はひとまづ春の海に解き 三月二十二日 ホトトギス社句会

朝市の春子の嵩でありにけり 目刺焼く戦火は人事にあらず

三月十三日 土筆会 虚子も炉を塞ぎし小諸旧居かな

平成十五年三月五日 一水会 丸之内倶楽部最後の春の宵 三月二十五日 若水会

春火鉢寄せて客間となりにけり 人送る桃の節句となりにけり 雨も又句座暖かくしたるもの

春火鉢遺し天寿を全うす 茨の芽彼女最近棘隠す 暖かき白さは富士の威容かな

三月六日 蕉心会 桃の日や一姫二太郎てふ生活 夙より蓬刻みし媼かな

大川に啓蟄の空映しをり 三月十八日 草木瓜会 春の海騒がせてゐる空母かな

春寒きこと大川に佇てば尚 春塵や会葬の列長かりし 三月二十八日 時雨会

水温みても黒々と隅田川 春塵に太陽赤く昇りけり 屋根替をして五百年絶えぬ家

雛納せざるをちらと見て出社 京雛より江戸雛より紙雛かな 丸ビルの高さに臙纏はりぬ

人土に還りて地虫穴を出づ 春塵を払ひ別れの言葉かな 三月二十九日 ホトトギス社吟行会

蕉像の視線の先に伊勢参 三月二十日 登高会 いと夫人偲ぶニコライ堂うらら

思案して春雨傘は持たざりし 大試験母真つ先に諦めて 漆黒の門を抜け来て初花に

而して春雨傘を買ひにけり 春雪の言の葉嫌ふ越後人

雑詠 汀子選

人々に虚子塔に落ち椿の実 八尾 岩垣子鹿
 神の森大秋晴へ抜け出たる 同
 大銀杏黄葉一本だけの空 同
 握手して露の別れとふと思ふ 京都 安原 葉
 一粒の露落ち辺り震動す 同
 露寒の横川路に踏み入りにけり 同
 花野忌といふ明るさに今年又 東京 稲畑廣太郎
 棒名富士正しく霧の登りゆく 同
 それぞれに羽音沈めて大花野 同
 卒寿なほ生き抜く力霜柱 京都 粟津松彩子
 霜柱踏みて立つ弱法師われ 同
 沈思黙考をほどきて蜜柑むく 同
 虚子館に息づく虚碧眼白来る 神戸 山田弘子
 秋風の川の真上の駅に下車 同
 新米の頃はやつぱりごはん党 同
 戒壇院磴を重ねて露けしや 姫路 桑田青虎
 露けしや痲癖の眉思惟の眉 同
 露けしや婆娑羅神将咆哮す 同

石組の四百年を昼の虫 東京 坊城俊樹
 金風の子を走らせて堂白し 同
 仏の磴登る冬めく石のぼる 同
 露の世に阿修羅鎮まり給へかし 豊中 滝 青佳
 初冬の雨は包むが如く来る 同
 時雨月雲に滲むと言ふのみぞ 同
 しばらくは晴れる予報や梅雨明けし 福岡 松尾緑富
 白南風やさまざまの雲走る尾根 同
 白南風や夕べ明るきチャイム鳴る 同
 思ひ出の虚子の涼しさ語るべし 日野 木村享史
 涼しさの虚子をきのふのごと語る 同
 仮寓出る日はまだ先や百日紅 同
 迷はずに句碑に着く径蛩草 石川 辻口静夫
 風化して読み躓きし露の句碑 同
 露しぐれ抜けて青空匂ふ街 同
 光ることなくしみじみと伊賀時雨 樞原 稲岡 長
 漂泊といふこと胸に伊賀の秋 同
 夜は殊に伊賀の晩秋てふ黙に 同
 白椅子に座せばたちまち避暑夫人 熊本 岩岡中正
 諸手あげれば秋天の降りてくる 同
 もしかして子規はしあはせ子規祀る 同
 生意気な少女となりて風邪引いて 東京 今井千鶴子
 薔薇越しに人あり秋の海があり 同
 ふと香る秋田杉串きりたんぼ 同

雑詠句評（二月号より）

又来よと虚子が隠せし霧の富士 東京 稲畑廣太郎

山中湖畔、虚子先生ゆかりの老柳山荘を訪れたときの作。このあたりは、晴れていても忽ち霧が深くなつてくることがある。山荘には、虚子先生が逗留された時代と同じような雰囲気が漂つており、残されている藤椅子や机なども、まことに慕わしかった。さらに附近を散策していると、晴れ渡つた彼方に美しく雄大な富士の姿があつた。作者は、他所では眺めることのできないような富士の姿に呆然と見惚れてしまったのである。家路につく日、もう一度富士を眺めたいと思つたのだが、一面に霧が立ちこめてしまつて思いを果たすことができなかつた。このとき作者は、「また来なさいね」と虚子先生が富士を隠してお預けにしまつたにちがいないと思つたのである。虚子先生と作者の強い絆を感じさせて止まない句である。（仁義）

霧が覆つて見えない富士山。みながつかりしている筈であるが作者はこれは虚子が又来なさいと言つているに違いないと諦めたのである。虚子が隠せしとはつきり言つたことで自分の心にもしつかり区切りがついたのである。霧の富士山も描けた。（汀子）

月仰ぎ見ては厨にまた戻る 東京 今井千鶴子

月の秋、その月を仰ぎ見ては戻つて台所の仕事を続ける。しばらくしてまたその事を繰り返す。台所仕事を中心だが心は月を離れない。一寸月を仰いではずぐ厨に戻るそんな仕ぐさが如実に見えてくる。そしてそんな仕ぐさをさせているその人の心の動きが手にとるように伝わってくる。モデルは第三者でもよいが、作者御自身に違いない。省略が利しているとか、過不足がないとか云う様な言葉は、この句のためにあるとさえ思われてくる。

（小木菟）

都会に住む者にとつて夜空に仰ぐべき星は殆ど見えなくなつてしまつたが、月の春秋は楽しむことができる。とくに秋は仲秋の名月もあり今年は特に美しい月が仰げた。東の窓に月の出を臨みまた厨仕事をする作者。主婦として作家としての立場を上手く両立させている一端が想像される句である。（汀子）

（以下略）

若水集

廣太郎選

八つ手の花・冬耕

冬耕の人落日の色となる 浜松 湖東紀子
 この庭の照る日曇る日花八手 同
 変はらざる暮しの隅に花八手 同
 ちりばめて雨明滅す花八手 高崎 吉村ひさ志
 大寺の順路に配し花八手 同
 花八手モーツアルトの朝ありぬ 同
 冬耕や夕日の中へ入りゆく 大阪 佐土井智津子
 冬耕や唄うてみたり黙したり 同
 なにもない空と湖冬耕す 同
 冬耕の整然として日の注ぐ 札幌 大地音生
 冬耕の跡は讃歌の五線譜に 同
 冬耕の大地の線に逆らはず 同
 冬耕や山脈壁となり囲む 大阪 塙 告冬
 冬耕の立ち止るとき空仰ぐ 同
 冬耕の終り太陽濃く積る 同
 冬耕に海とは遠く光るもの 半田 高須のぶを
 動かざること冬耕の丘にかな 同
 冬耕や母の使ひし細柄鍬 同

冬耕の行き着けばまた向きを変へ 香川 内原弘美
 冬耕の足にまつはる土煙 同
 冬耕の山肌を斜に踏ん張つて 同
 花八手宇宙交信白き手で 広島 後藤智恵子
 花八手風に不動の意志を持つ 同
 冬耕やひと筋の道風の道 同
 冬耕や太陽はまだ遠くなる 福山 竹下陶子
 冬耕の日射に刻を読みし母 同
 日本に冬耕の日の太古より 同
 冬耕の人寄せつけぬ背中かな 大牟田 介弘紀子
 語らざる冬耕の背の語るもの 同
 冬耕の埴輪のやうな顔をして 同
 冬耕に乾きし風の比叡日和 吹田 生澤瑛子
 叡山の僧とや一人冬耕す 同
 冬耕に雲影動く比叡の里 同
 冬耕の畑黒々と飛機降下 釧路 三関きよし
 冬耕をちよと手伝ひてまた上京 同
 冬耕す北の大地の片隅を 同
 日も風も貧しき苑や花八手 群馬 木暮陶句郎
 冬耕や茜色なる十勝岳 同
 バンダナの漢が混じり冬耕す 同
 冬耕の西も東も風の中 岡山 富阪宏己
 冬耕す土の固まる意志砕き 同
 僧形の邦人異人冬耕す 同

若水集句評 廣太郎

子が感じられる。僧が一人、という事も、事実を詠んではいるが季節が効果的に感じられる。

ガラス戸の拭込まれあり花八手 香川 山崎 一角

冬耕の人落日の色となる 浜松 湖東紀子

寒々とした「冬耕」の様子が見て取れる。この季節は日の落ちるのが早い。一日中耕していたのだろうか。仕事に勤しむうちに早くも夕暮れが近づいてくる。人が「落日の色となる」という詩的な表現が、夕日の凜とした色と季節の性格を的確に詠み切っている句である。

花八手宇宙交信白き手で 広島 後藤智恵子

よく見ると「花八手」は他の一般的な花に比べて色もそれ程鮮やかではなく、何か地球上の植物にしては少しユニークな形しているのではないだろうか。「宇宙交信」のアンテナに見立てていような斬新な表現が面白い。

叡山の僧とや一人冬耕す 吹田 生澤瑛子

「西の虚子忌」でおなじみの比叡山である。山の中にある田や畑なのであろうか。修行の一環とも見て取れ、山故の厳しい冬の様

大きなお屋敷の、壁一杯に広がっている窓を想像するのは大袈裟だろうか。ついでに広い庭に咲く「花八手」。こちらはその広い庭にそれほど目立たずに咲いている。そんな両者の取り合わせを想像する事で季節ならではの風情が見て取れるように思うのは筆者だけだろうか。

今朝もまた冬耕の音聞えけり 新潟 藤井敏子

作者の地名から想像すると、やはり米どころなのであろう。秋の収穫が終わって、広い田を再び朝早くから耕しているのであろう。「音聞え」というところから実際の姿を見ているのではないが、その「音」から熱心に勤しむ姿も見えてくるようだ。自然の厳しさも感じられる句である。

花八手そのまま盛られおままごと 徳島 渡辺理絵

よく見てみると、なるほど「花八手」は何かそのままでも食べられそうな形している。いち早くその形に着目した子供たちは早速「おままごと」の食材としてしまったのである。子供の発想の豊かさ、それに応える季節の様子がユニークである。